

資料 2－2

全国的な学力調査に関する専門家会議（令和7年度第2回）
調査結果の取扱い検討ワーキンググループ（第5回）合同会議
2025年5月28日（水） 9:30-12:00

令和6年度

学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究
（専門的な知見を活用した高度な分析に関する調査研究）

A. 全国学力・学習状況調査の国語の結果を活用した専門的な分析

調査報告

令和7年3月
安田女子大学

1. 調査研究テーマ

学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究（専門的な知見を活用した高度な分析に関する調査研究）

A. 全国学力・学習状況調査の国語の結果を活用した専門的な分析

2. 調査研究の趣旨

- 平成29年告示学習指導要領では、小学校国語、中学校国語ともに、育成を目指す資質・能力の明確化という改訂の基本方針を踏まえ、「内容」を〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕で構成することや、〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域において、学習過程を一層明確にし、各指導事項が位置付けられている。全国学力・学習状況調査においても、これらを踏まえ、「調査問題作成の枠組み」として以下が示されている。

学習指導要領に示されている以下の内容に基づいて、その全体を視野に入れながら、中心的に取り上げるものを精選した。なお、中学校第2学年までの内容となるようにしている。

〔知識及び技能〕

(1)言葉の特徴や使い方に関する事項

(2)情報の扱い方に関する事項

(3)我が国の言語文化に関する事項

〔思考力、判断力、表現力等〕

A 話すこと・聞くこと

B 書くこと

C 読むこと

※「A 話すこと・聞くこと」については、生徒が実際に話したり聞いたりするような調査を行うことが難しいため、場面設定・状況設定などを工夫して、話す・聞く活動にできるだけ近づけた出題となるようにした。また、評価の観点として、「知識・技能」、「思考・判断・表現」に関わるものを出題した。

（国立教育政策研究所教育課程研究センター（2023）「令和5年度全国学力・学習状況調査 解説資料 中学校国語」による）

- これらを踏まえ、現行学習指導要領が実施された翌年以降（小学校：令和3～6年度、中学校：令和4～6年度、）に実施された全国学力・学習状況調査の国語の教科調査及び質問調査の結果を対象とし、後述する国語科の特質を踏まえた各項目について、平均正答率が高い（低い）など特徴ある結果を示した学校や教育委員会等の取組について、質問調査の結果等も活用した分析を行うとともに、授業における学習指導の考え方など、実際の取組状況についてアンケートや訪問ヒアリングによる調査を行うこととした。
- 調査研究に当たっては、施策への反映や調査の妥当性・信頼性を高めるため、文部科学省と緊密な協議を行った。

3. メンバー

○ 小学校部会

主査 難波 博孝（安田女子大学教育学部児童教育学科 教授）
 委員 吉田 裕久（安田女子大学教育学部児童教育学科 教授）
 委員 中村 和弘（東京学芸大学大学院教育学研究科 教授）
 委員 折川 司（金沢大学人間社会研究域学校教育系 教授）
 委員 北川 雅浩（熊本大学教育学部国語科教育講座 准教授）
 委員 渡辺 誠（横浜市教育委員会事務局教育政策推進課 首席指導主事）

○ 中学校部会

主査 大滝 一登（再掲）※本事業責任者
 委員 高木まさき（教科書研究センター 統括研究監）
 委員 安部 朋世（千葉大学教育学部 教授）
 委員 黒田 諭（北海道教育大学附属函館中学校 副校長）
 委員 松下 達彦（国立国語研究所研究系 教授）
 委員 笹尾 洋介（京都大学国際高等教育院 准教授）

○ データ分析部会

主査 笹尾 洋介（再掲）
 委員 松下 達彦（再掲）
 委員 難波 博孝（再掲）
 委員 大滝 一登（再掲）

4. 調査研究の具体的な内容

・研究課題①

「C読むこと」における「考えの形成」に関する特徴的な結果の抽出とその要因の検討

【対象調査】 令和5年度調査（「考えの形成」に位置付けられた出題がなされたのはこの年度のみ）

【研究方法】 データ分析・訪問校抽出→対象校への訪問調査（ヒアリング、授業参観）

・研究課題②

「C読むこと」における各学習過程に関する特徴的な結果の抽出

【対象調査】 令和6年度及び令和5年度調査

【研究方法】 データ分析

・研究課題③

特定の領域の調査結果と他の領域または質問調査結果との相関に関する特徴的な結果の抽出

【対象調査】 令和6年度調査

【研究方法】 データ分析

・研究課題④

その他、令和6年度調査結果に関する顕著な特徴についての分析

【対象調査】 令和6年度調査

【研究方法】 データ分析

5. 研究課題①（「C読むこと」における「考えの形成」に関する特徴的な結果の抽出とその要因の検討）について

(1) 調査研究校を決定するまでの流れ

条件1：学校種からの絞り込み

小学校国語の調査問題を実施した全学校（ $N = 18,846$ ）のうち、令和5年4月18日当日に調査問題を実施した公立小学校のみを抽出した。
ただし、特別支援学校と義務教育学校は除外した。

中学校国語の調査問題を実施した全学校（ $N = 9,740$ ）のうち、令和5年4月18日当日に調査問題を実施した公立中学校のみを抽出した。
ただし、中等教育学校（前期課程）、特別支援学校、義務教育学校、ならびに都立・府立・県立の中学校は除外した。

- ・ 小学校：18,277校
- ・ 中学校：8,826校
が該当（条件1を満たす）

条件2：「読むこと」領域の設問からの絞り込み

- 以下の二つの条件を設定した。
- (1)令和5年度「読むこと」領域の設問における平均正答数が全体平均より0.5SD以上であること
 - (2)令和5年度「読むこと」の「考えの形成」の資質・能力を問う設問における平均正答率が全体平均より0.5SD以上であること

小学校の絞り込みに使用した問題

問題番号		出題の趣旨	問題形式	全国平均 正答率	条件2の (1)	条件2の (2)
2	一	目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約することができるかどうかをみる。	選択式	90.1%	○	
2	二	目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる。	選択式	67.6%	○	
2	四	文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる。	記述式	56.4%	○	○

中学校の絞り込みに使用した問題

問題番号		出題の趣旨	問題形式	全国平均 正答率	条件2の (1)	条件2の (2)
2	二	観点を明確にして文章を比較し、表現の効果について考えることができるかどうかをみる	選択式	63.4%	○	
2	三	文章の中心的な部分と付加的な部分について叙述を基に捉え、要旨を把握することができるかどうかをみる	選択式	74.5%	○	
2	四	文章を読んで理解したことなどを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができるかどうかをみる	記述式	67.8%	○	○
4	三	文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる	記述式	50.5%	○	

- ・ 小学校：3,328校
- ・ 中学校：1,395校
が該当（条件1と2を満たす）

条件3：学校質問項目からの絞り込み

以下の二つの条件を設定した。

(1) 令和5年度調査において以下の学校質問項目で「そう思う」と回答した学校

- ・項目26：調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか
- ・項目27：調査対象学年の児童は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか

(2) 令和6年度調査においても上記（1）と同じ学校質問項目で「そう思う」と回答した学校

- ・ 小学校：140校
- ・ 中学校：93校
が該当（条件1～3を満たす）

条件4：社会経済条件からの絞り込み

自宅の蔵書数を、児童生徒の社会経済的背景（SES）を示す指標の一つと捉え、小学校・中学校ともに、以下の条件を設定した。

- ・自宅にある本の冊数の推定値の学校平均が全体平均より1.0SD以下であること

児童質問紙（22）または生徒質問紙（22）の設問「あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか（雑誌、新聞、教科書は除く）」に対する回答を基に、選択肢ごとの中央値を代用値として算出（0～10冊→5冊、11～25冊→18冊、26～100冊→63冊、101～200冊→151冊、201～500冊→351冊、501冊以上→501冊）

条件1から条件3までの絞り込みを行った結果、首都圏や大都市圏の学校が多く抽出された。そこで、社会経済状況が平均的な水準にある学校を選定することを目的とし、本条件を設定した。なお、児童生徒や学校の社会経済的背景（SES）に関する直接的な指標は本調査では利用できないため、各学校における児童生徒の自宅での蔵書数の平均値を、SESの代替指標として用いた。

- ・ 小学校：96校
 - ・ 中学校：62校
- が該当（条件1～4を満たす）

条件5：学校規模による絞り込み

個人の結果が学校全体の平均に大きく影響することを避けるために、以下の条件を設けた。

- ・令和5年度 国語調査参加者（当日実施）が30人以上の学校であること

- ・ 小学校：48校
 - ・ 中学校：44校
- が該当（条件1～5を満たす）

【アンケート調査】 特徴ある結果を示した学校へのアンケート調査による、取組内容等の把握

条件1～5によって絞り込まれた**小学校48校、中学校44校を対象**に、以下のようなアンケート調査を実施した。

- ・ 実施にあたっては、文部科学省総合教育政策局調査企画課学力調査室より、調査対象候補となった学校がある都道府県教育委員会及び当該校を所管する市町村教育委員会に依頼文書を発出した。
- ・ この依頼文には、調査対象候補へのアンケートは、文部科学省から学校に直接依頼をすることや、アンケート調査の結果、追加で訪問調査を依頼することがあることを記載した。
- ・ アンケート内容は、「1. 学校全体について」と「2. 国語科の授業について」で構成した。
- ・ 「1. 学校全体について」については、学校の代表の方に回答を依頼した。
- ・ 「2. 国語科の授業について」については、令和5年度全国学力・学習状況調査（国語科）の対象児童生徒を、直接指導されていた教師に回答を依頼した。人事異動等で、該当の教師が在籍されていない場合には、現在、学校で国語科教育を中心的に行っている教師に回答を依頼した。

小学校へのアンケート内容		中学校へのアンケート内容	
1. 学校全体について 国語科教育における取組		1. 学校全体について 国語科教育における取組	
貴校は、過去3年間に、教育委員会等から研究指定(取り組む教科に国語科が含まれている)を受けていましたか。	1 (1)	1 (1)	貴校は、過去3年間に、教育委員会等から研究指定(取り組む教科に国語科が含まれている)を受けていましたか。
(問1－(1)で「1.はい」と回答された方へ)それは、どのような研究指定でしたか。名称を教えてください。	1 (2)	1 (2)	(問1－(1)で「1.はい」と回答された方へ)それは、どのような研究指定でしたか。名称を教えてください。
貴校では、今年度、校内研修も含めて、よりよい国語科授業のあり方を求めて研究授業が行われましたか。もしくは、今後、行われる予定はありますか。	2 (1)	2 (1)	貴校では、今年度、校内研修も含めて、よりよい国語科授業のあり方を求めて研究授業が行われましたか。もしくは、今後、行われる予定はありますか。
(問2－(1)で「1.はい」と回答された方へ)その「研究授業」の内容はどのようなものでしたか。学年や領域、教材などを教えてください。	2 (2)	2 (2)	(問2－(1)で「1.はい」と回答された方へ)その「研究授業」の内容はどのようなものでしたか。学年や領域、教材などを教えてください。
(問2－(1)で「1.はい」と回答された方へ)研究授業の成果があがるようにするために、どのような工夫を行っていますか、具体的に教えてください。	2 (3)	2 (3)	(問2－(1)で「1.はい」と回答された方へ)研究授業の成果があがるようにするために、どのような工夫を行っていますか、具体的に教えてください。
貴校では、今年度、よりよい授業づくりのためにお互いの授業を見合うなど、教員が相互に学ぶ機会を設けていますか。	3 (1)	3 (1)	貴校では、今年度、よりよい授業づくりのためにお互いの授業を見合うなど、教員が相互に学ぶ機会を設けていますか。
(問3－(1)で「1.はい」と回答された方へ)それは、どのような取組ですか。具体的に教えてください。	3 (2)	3 (2)	(問3－(1)で「1.はい」と回答された方へ)それは、どのような取組ですか。具体的に教えてください。
貴校の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。	4 (1)	4 (1)	貴校の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。
(問4－(1)で「1.そう思う」「2.どちらかといえば、そう思う」と回答された方へ)児童が、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができるようにするために、どのような取組をしていますか。	4 (2)	4 (2)	(問4－(1)で「1.そう思う」「2.どちらかといえば、そう思う」と回答された方へ)生徒が、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができるようにするために、どのような取組をしていますか。
貴校の児童は、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると考えますか。	5 (1)	5 (1)	貴校の生徒は、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると考えますか。
(問5－(1)で「1.そう思う」「2.どちらかといえば、そう思う」と回答された方へ)児童が、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができるようにするために、どのような取組をしていますか。	5 (2)	5 (2)	(問5－(1)で「1.そう思う」「2.どちらかといえば、そう思う」と回答された方へ)生徒が、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができるようにするために、どのような取組をしていますか。
貴校において令和4年度第5学年の国語科指導を直接行った教員で、今年度も貴校に勤務されている教員はいますか。	6	6	貴校において令和4年度第2学年の国語科指導を直接行った教員で、今年度も貴校に勤務されている教員はいますか。
貴校では、全国学力・学習状況調査の問題や結果について活用していますか。	7 (1)	1 (1)	貴校では、全国学力・学習状況調査の問題や結果について活用していますか。
(問7－(1)で「1.活用している」「2.どちらかといえば、活用している」と回答された方へ)活用の仕方について、簡潔に教えて下さい。	7 (2)	7 (2)	(問7－(1)で「1.活用している」「2.どちらかといえば、活用している」と回答された方へ)活用の仕方について、簡潔に教えて下さい。

小学校へのアンケート内容		中学校へのアンケート内容	
2. 国語科授業の取組		2. 国語科授業の取組	
このアンケートに回答くださる方は、令和5年度全国学力・学習状況調査(国語)の対象児童を令和4年度(小学校第5学年の時)に直接指導されていた先生ですか。	1	1	このアンケートに回答くださる方は、令和5年度全国学力・学習状況調査(国語)の対象生徒を令和4年度(中学校第2学年の時)に直接指導されていた先生ですか。
貴校は、国語科授業づくり(指導方法、ICTの活用、評価など)や教材研究に関して、教員間で気軽に相談し合っていますか。	2 (1)	2 (1)	貴校は、国語科授業づくり(指導方法、ICTの活用、評価など)や教材研究に関して、教員間で気軽に相談し合っていますか。
(問2－(1)で「1.よく行っている」「2.少し行っている」と回答された方へ)特徴的なエピソードを具体的に教えてください。	2 (2)	2 (2)	(問2－(1)で「1.よく行っている」「2.少し行っている」と回答された方へ)特徴的なエピソードを具体的に教えてください。
あなたが、学習指導要領の「C 読むこと」に示された学習過程(指導事項)の重要度ついて、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。	3	3	あなたが、学習指導要領の「C 読むこと」に示された学習過程(指導事項)の重要度ついて、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。
あなたが、小学校高学年の国語科「C 読むこと」の言語活動として、よく行っているものを選択してください。	4 (1)	4 (1)	あなたが、中学校の国語科「C 読むこと」の言語活動として、よく行っているものを選択してください。
あなたが、小学校の国語科「C 読むこと」の言語活動を取り入れる際に重視していることはどのようなことですか。	4 (2)	4 (2)	あなたが、中学校の国語科「C 読むこと」の言語活動を取り入れる際に重視していることはどのようなことですか。
「C 読むこと」の指導において、あなたは、児童が考えを形成し、表現する学習活動をどの程度行っていますか。	5 (1)	5 (1)	「C 読むこと」の指導において、あなたは、生徒が考えを形成し、表現する学習活動をどの程度行っていますか。
(問5－(1)で1～3と回答した方にお尋ねします。)児童が表現したものを見取る時や評価するときに気を付けていることを教えてください。	5 (2)	5 (2)	(問5－(1)で1～3と回答した方にお尋ねします。)生徒が表現したものを見取る時や評価するときに気を付けていることを教えてください。
児童が文章を読んで考えを形成できるようにするために、指導で工夫している点を教えてください。	5 (3)	5 (3)	生徒が文章を読んで考えを形成できるようにするために、指導で工夫している点を教えてください。
「言葉の特徴や使い方に関する事項」のうち、児童が文章を読んで考えを形成できるようになる上での重要度について、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。	6 (1)	6 (1)	「言葉の特徴や使い方に関する事項」のうち、生徒が文章を読んで考えを形成できるようになる上での重要度について、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。
「言葉の特徴や使い方に関する事項」の指導で工夫している点(特に「C 読むこと」の指導と関連付けた指導における工夫)を教えてください。	6 (2)	6 (2)	「言葉の特徴や使い方に関する事項」の指導で工夫している点(特に「C 読むこと」の指導と関連付けた指導における工夫)を教えてください。
「情報の扱い方に関する事項」のうち、児童が文章を読んで考えを形成できるようになる上での重要度について、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。	7 (1)	1 (1)	「情報の扱い方に関する事項」のうち、生徒が文章を読んで考えを形成できるようになる上での重要度について、最も重要な場合を5として、5段階で評価してください。
「情報の扱い方に関する事項」の指導で工夫している点(特に「C 読むこと」の指導と関連付けた指導における工夫)を教えてください。	7 (2)	7 (2)	「情報の扱い方に関する事項」の指導で工夫している点(特に「C 読むこと」の指導と関連付けた指導における工夫)を教えてください。
小・中学校学習指導要領では、「(3)我が国の言語文化に関する事項」に読書の指導事項が明記されていますが、その指導を行う際に工夫している点を教えてください。	8	8	小・中学校学習指導要領では、「(3)我が国の言語文化に関する事項」に読書の指導事項が明記されていますが、その指導を行う際に工夫している点を教えてください。
あなたは、国語科の授業でICT(一人一台端末を含む)を活用していると思いますか。	9	9	あなたは、国語科の授業でICT(一人一台端末を含む)を活用していると思いますか。
あなたが、小学校の国語科「C 読むこと」の学習評価を適切に行うために、どのようなことを重視していますか。	10	10	あなたが、中学校の国語科「C 読むこと」の学習評価を適切に行うために、どのようなことを重視していますか。

【絞り込み】 訪問調査を実施する学校の絞り込み

アンケート調査の結果を踏まえ、以下のように訪問調査を実施する学校を絞り込んだ。

小学校	中学校
【回答率】 ・「1. 学校全体について 国語科教育における取組」のアンケートについては、48 件中 34件の回答を得た。（回答率 70.8%） ・「2. 国語科授業の取組」のアンケートについては、48 件中 35 件の回答を得た。（回答率 72.9%）	【回答率】 ・「1. 学校全体について 国語科教育における取組」のアンケートについては、44 件中 29件の回答を得た。（回答率 65.9%） ・「2. 国語科授業の取組」のアンケートについては、44 件中 28 件の回答を得た。（回答率 63.6%）
ここから（視点1）（視点2）によって、訪問調査校の絞り込みを行った。	
（視点1）成果を上げている学校に見られる、共通項をさぐる。	
1. 「学校全体について 国語科教育における取組」の調査から	
問3—（1）「貴校では、今年度、よりよい授業づくりのためにお互いの授業を見合うなど、教員が相互に学ぶ機会を設けていますか。」について、「1. はい」と回答している学校は、小学校で97.1%、中学校で96.7%であった。	
問7—（1）「貴校では、全国学力・学習状況調査の問題や結果について活用していますか。」について、「1. 活用している」「2. どちらかといえば、活用している」と回答している学校は、小学校で94.3%、中学校で86.6%であった。	
2. 「国語科授業の取組」の調査から	
問2—（1）「貴校は、国語科授業づくり（指導方法、ICTの活用、評価など）や教材研究に関して、教員間で気軽に相談し合っていますか。」について、「1. よく行っている」「2. 少し行っている」と回答している学校は、小学校で90.0%であった。（なお中学校については規模の小さい学校もあるためこの基準は考慮しなかった。）	
問5—（1）「「C 読むこと」の指導において、あなたは、児童生徒が考えを形成し、表現する学習活動をどの程度行っていますか。」について、「1. よく行っている」「2. まあまあ行っている」と回答している学校は、小学校で95.0%、中学校で89.3%であった。	
問9「あなたは、国語科の授業でICT（一人一台端末を含む）を活用していると思いますか。」について、「1. はい」と回答している学校は、小学校で90.0%、中学校で82.1%であった。	

（視点 2）中学校について、（1）の条件を弱め新たな条件を別途加える。

（視点 1）によって小学校については候補校を 1 3 校に絞ることができたが、中学校の候補校が少なかったため、（1）の絞り込み条件を弱めた上で、下記の条件を新たに加えて絞り込んだ。

問 3「あなたが、学習指導要領の「C 読むこと」に示された学習過程（指導事項）の重要度について、最も重要な場合を 5 として、5 段階で評価してください。」のうち「考えの形成・共有」に 5 と記入している学校。中学校で 67.9% であった。

問 5 — （2）「生徒が表現したものを見取る時や評価するときに気を付けていることを教えてください。」および問 5 — （3）「生徒が文章を読んで考えを形成できるようにするために、指導で工夫している点を教えてください。」について、特に注目する回答があった学校。

具体的な回答の一部は以下の通りである。

問 5 — （2）「生徒が表現したものを見取る時や評価するときに気を付けていることを教えてください。」	問 5 — （3）「生徒が文章を読んで考えを形成できるようにするために、指導で工夫している点を教えてください。」
考える中で、最終的に出来上がった意見だけを見るのではなく、どのような過程を経てその考えが形成されたか、当初抱いていた考えとの共通点、相違点はどこか。それらの考えが文章や学習したこととどのように結びついているのかをしっかりと見ること。	学習の最初から最後まで、一方通行で展開するのではなく、つまずいたりうまくいかなかったりする場面では、立ち止まって必要な事項においてじっくりと説明したり、少し前に遡って復習を行うことにより、最終的に振り返ったときに、自分の思考の足跡が見えやすいようにしている。
学習初期の段階では、文章の長さや内容の質にこだわるよりも、「自分で考えて書く」ということを重視するように指導している。また、問いに対する考えを、段階を踏んで考えさせることを通して、理解度や考えの深まり・広がりを見取るようにしている。	文章を簡単なスライドにまとめて発表する学習活動の中で、自分の考えを組み込んで伝える場面を設定するなど、自然と自分の考えをもてるような授業づくりを意識している。
評価基準を明確にすること。	生徒の文章を ICT を活用し、解答（模範解答）の共有する場面を作っている。
その表現や考えが本文の内容を逸脱していないか、をまず考えます。本文に書かれているもの、間接的に書かれているもの、書かれてはいないが十分にそう考え得る根拠のあるもの（妥当なもの）、多少の想像は含むが、その考えを持つこと自体は妥当なもの、の四段階に分け、子どもの発想を生かしつつ授業を展開します。重要なのは読みの多様性の担保という、量的な広がりを保障することと、同時に質の担保を行うことだと思います。そのため、より高い質の読みに価値があると気づかせ、評価していくことで、全体の読みの段階を引き上げていけると考えています。	自由な発想を持つ際のルールを、上記のもののように示すことで、多様な考えが出てくるよう想定しつつ、持ちえない視点だけを提示したり、他の考えと比較・組み合わせる助言のみを行います。生徒を暗に少しずつ導く部分はありつつも、生徒自身が自分の力で考えを形成できたという実感を持てるようにします。スローラーナーには、入り口になる「●●に注目してみよう」といったことは示しますが、その中身の気づきや感じ方に違いがあることを伝えることで、考えるきっかけは与えつつ、どんな子にも自分で考えを作ったという経験ができるよう指導しています。
相手・目的・意図を明確にし、生徒の身近な生活場面や体験に結びつく内容として、自分ごととしてとらえることができているかを見極めるようにしている。	主体的に読みたくなるような仕掛けづくりをこころがけ、生徒が自身の知識や経験を想起し、他者と考え合い、共感したり新たな発見をしたりすることで考えを深めることが重要である。そのために、個で考えたことを基にグループで協働的にまとめ、さらにクラス全体で共有する機会を大切にしている。
特にグループ学習の場面では、全てのやり取りを把握することは難しいため、毎回書記を設定し、話し合いの内容を言語化してもらうことを意識している。この記録をもとに、生徒の意見や思考の過程をできる限り見取るよう努めている。	まず、生徒一人ひとりが文章を読んで自分の考えを整理し、それを明確にする時間を設けている。その後、グループでの話し合いを通じて、他者の視点や新たな知見を得られる場を提供している。このようにすることで、ただ他者の意見に流されるのではなく、自分の考えを基盤にしながら、多様な意見と向き合うことができるようになる。
また、評価を行う際には、評価基準を事前に生徒に公表し、透明性を持たせることを大切にしている。これにより、生徒が自分たちの目指すべき方向性を理解しやすくなるだけでなく、公平な評価を心がけることにもつながっている。	この学習形態によって、生徒が主体的に考えを深める力を育み、文章を通して得た知識や考えをより豊かにすることを目指している。
こうした工夫を通じて、生徒の表現や学びのプロセスを適切に把握し、信頼される評価を行うよう努めている。	

条件 1 ～ 5 及びアンケート結果からの（視点 1）（視点 2）を満たす学校として、小学校は 1 3 校、中学校 1 2 校が該当した。訪問調査の依頼を行った結果、小学校、中学校とも 1 2 校から訪問調査の承諾を得ることができた。

小学校 → 1 3 校が該当

訪問依頼の結果
→ 1 2 校訪問

中学校 → 1 2 校が該当

訪問依頼の結果
→ 1 2 校訪問

(2) 訪問調査の実際

① 訪問校及び実施日

※ 訪問校は非公開

【小学校】

	訪問校	訪問日
1	A小学校	令和7年3月6日（木）
2	B小学校	令和7年2月18日（火）
3	C小学校	令和7年2月28日（金）
4	D小学校	令和7年2月28日（金）
5	E小学校	令和7年2月19日（水）
6	F小学校	令和7年2月25日（火）
7	G小学校	令和7年2月19日（水）
8	H小学校	令和7年2月27日（木）
9	I小学校	令和7年2月18日（火）
10	J小学校	令和7年2月27日（木）
11	K小学校	令和7年2月27日（金）
12	L小学校	令和7年2月19日（水）

【中学校】

	訪問校	訪問日
13	N中学校	令和7年2月28日（金）
14	O中学校	令和7年2月28日（金）
15	P中学校	令和7年2月20日（木）
16	Q中学校	令和7年2月17日（月）
17	R中学校	令和7年2月19日（水）
18	S中学校	令和7年2月18日（火）
19	T中学校	令和7年2月5日（水）
20	U中学校	令和7年2月17日（月）
21	V中学校	令和7年2月17日（月）
22	W中学校	令和7年2月4日（火）
23	X中学校	令和7年2月28日（火）
24	Y中学校	令和7年2月19日（水）

② 実施方法

訪問調査を実施するに当たり、訪問時の主な観点として、訪問校を決定するまでの過程を踏まえ、以下の1～6の観点からインタビュー調査、一部の学校は授業参観も行った。

1. 考えの形成について
2. 語彙指導の充実、読書の質向上等について
3. 学習評価について
4. 国語科におけるICTの活用について
5. 他の学校にも無理なく展開可能な国語科の取組や工夫について
6. その他、顕著な特徴が認められる取組や工夫について

なお、訪問調査は、令和7年2月～令和7年3月にかけて実施した。

③ 訪問調査の結果（※教職員の発言や一部の授業参観等から得られた学校の実践をまとめたもの）

1. 「考えの形成」について

小学校	中学校
児童が主体的に考えを深める力を育むため、学習の目標や展開を明確に示し、発問や対話を通じて思考を促す。書く活動や、発表・スピーチ等の機会を増やしたりするなど、自分の考えを表現する多様な活動を取り入れる。 ○学習の目標や展開の提示 目標や学習活動の流れを図示するなど児童に分かりやすく示して学習計画を意識させ、学習の見通しを明確に示す。 ○言語活動の重視 「書くこと」や「話すこと」の学習を踏まえ、「読むこと」でも自分の考え等を表現する活動を重視する。 ○根拠に基づく読み 文章を構造的に分析し、本文中の叙述等を明確に示して、妥当な推論を行わせる。 ○学年間の系統的な接続 低学年の学びを高学年でも活用できるよう系統的な指導計画を作成する。 ○対話を通じた思考の深化 児童同士の意見交換を活発にし、多様な視点を学ばせる。 ○発問の工夫 「あなた自身はどう考える？」など児童が自分の考えを表現できるよう、問い掛けを工夫する。 ○意見と理由を意識した書く活動の重視 文章を書く際に、意見と理由のつながりを明確にさせることで、論理的な思考を促す。 ○既習教材との比較 「読むこと」の学習で、既習教材と比較させ、内容や表現について深く考えられるよう工夫する。 ○協働的な活動の重視 グループ活動等を積極的に取り入れ、意見交換を通じて思考を深めたり広げたりさせる。	生徒の主体的な学びを促進するため、多様な視点を提供し、話し合い活動を活用する。学習の選択肢を広げたり、単元ごとの課題を明示したりするなどして、思考の深化を促す。 ○学習計画の共有 単元の学習計画を生徒と共有して、学習の目標や展開を意識させ、学習の見通しをもたせる。 ○学習課題の工夫 単元の最初に生徒に問いを設定させたり、生徒が疑問を抱きやすい問いを提示したりするなど、学習課題を工夫し、考えを深めさせる。 ○表現活動の重視 表現活動の機会を増やし、対話を通じて他者の意見に触れる環境を整える。 ○学習の進め方の工夫 目標実現に向けた複数の方法を示し、生徒が自らに適した学習方法を選べるようにする。 ○多様な視点の提供 説明文分析の際、「叙述内容」「構成」「具体例」など複数の視点を示し思考を深めさせる。 ○主体的な学習の姿勢 自らの学習状況を把握させる場面を充実させ、自ら学習を改善できるようにさせる。 ○指導方法の定着 場当たり的な指導ではなく継続的な実践を通じ、学校の実態に応じた指導方法として確立する。 ○生徒の自主性の尊重 教師の介入を必要最小限に抑え、自主的に考える機会を増やす。 ○対話しやすい環境の整備 目的や必要に応じて相手を選ばせるなど、対話しやすい環境を整備する。

2. 語彙指導の充実、読書の質向上等について

小学校	中学校
音読や語彙に関する学習を継続的に取り入れ、言葉に対する理解を深めさせ、読むことや書くことの力に生かす。読書活動を推奨したり、多様な読書活動を促したりして本や文章を流暢に読む力の育成を図る。 ○継続的な音読 低学年での毎朝の音読や、音読の繰り返しを取り入れ、児童が文章を流暢に読めるよう、計画的に取り組む。 ○語彙指導の重視 授業で出会った語彙を「言葉のコレクション」として記録させ、様々な場で積極的に活用させるよう促す。また、文脈を通じた語彙の習得を促し、文章を正確に読めるようにするとともに、適切な表現力の育成につなげる。 ○ICTを活用した語彙指導 一人一台端末の辞書機能を活用し、新しい語彙の習得を支援する。 ○読書活動の推奨・促進 学校図書館を積極的に活用させ、児童が読書に親しむ機会を増やす。また、クラスで同じ本を読み、読書会での意見交換を行わせる。	音読・朗読を通じて文章の意味理解を促し、ICT活用も含めた語句の理解を図り、語彙を豊かにする。多様な本や文章を読む読書活動を推進し、文章を流暢に読んで考えを形成する力の育成を図る。 ○継続的な音読・朗読 音読・朗読の指導を充実させることによって、生徒が文章を流暢に読めるよう、計画的に取り組む。 ○語彙指導の重視 学習した語句の定着状況をきめ細やかに確認することで、意味を理解している語句の数を増やす。また、「要約」「要旨」など当該学習課題と関わりの深い語句を定義するなどして意識させる。 ○ICTを活用した語彙指導 クイズ形式のICTによる語彙学習ツールを活用し、ゲーム感覚なども取り入れながら語彙の習得を促進する。 ○多様な読書活動の導入 教科書教材と関連したテーマに関する様々な立場や考え方が書かれている本を幅広く読むことで楽しみながら学習を進められるようにする。

3. 学習評価について

小学校	中学校
形成的な評価を重視し、学習の進捗状況を可視化して、学習の質や学習意欲の向上を図る。振り返りシート等を活用し、児童が自ら学びを振り返る機会を増やし、教師による評価の参考とする。 ○形成的な評価の重視 授業中の発言やノートの記述内容を例えば4段階で評価するなどし、教師が学習状況を把握するとともに、子供たちにも毎回フィードバックする。 ○学習目標の明示 「こういうことができるようになるといいよね」などの言葉掛けを行ったり、単元の最初に児童が理解できる言葉で学習の目標を示したりして、児童が目標を把握できるようにするとともに、振り返りをしやすくさせる。 ○児童に対するフィードバックの工夫 児童の発言や記述に対して具体的なコメントを加え、必要に応じて学習の改善に取り組めるようにする。 ○ICTの活用 一人一台端末を使うなどして、学習したことを記録し、学習の進捗状況を児童自身が整理する習慣を育てる。 ○学習の振り返りの充実 「学びの自治力」というフレーズを使うなどして、自覚的に自己評価を行わせ、学びの成果を実感させるとともに、学習の改善に取り組めるようにする。	評価規準の明示や記述課題、ICTを活用した振り返りを通じて生徒の学習状況を把握する。また、評価の観点を明確に示すことで、生徒による自己評価等の評価を充実させ、教師による評価の参考とする。 ○形成的な評価の重視 「Bと判断する状況」の具体的な想定により、記述式の課題や話し合い活動での発言内容、振り返りシート、授業中の発言などを基に適切に学習状況を把握し、必要に応じて学習の改善を促す。 ○生徒の自己評価の活用 評価の観点を具体的に分かりやすく示すことで生徒に学習の目標を理解させた上で、観点に基づいて学習活動としての自己評価を行わせ、学びの成果を実感させるとともに、教師による評価の参考とする。 ○ICTの活用 学習ソフトのアンケート機能を使うなどして、比較的容易に自らの学習状況を把握させ、学習改善のポイントを自覚させ、教師による評価の参考とする。 ○グループ活動での振り返り グループ活動ではICTを活用して活動状況の記録を残し、記録を基に自分の学習状況について具体的に振り返らせるとともに、教師による評価の参考とする。

4. 国語科におけるICTの活用について

小学校	中学校
一人一台端末や電子黒板、辞書・録音機能などを活用し、学習状況の可視化や意見の共有、自主的な学習を促進するとともに、協働的な学びや個別最適な学びが図られるよう、効果的な学習支援を行う。 ○文章構造の可視化 電子黒板や一人一台端末を通して文章構造を可視化し、抽象的な思考の支援を行う。 ○学びの蓄積 一人一台端末を意見交換やプレゼンテーション資料の作成だけではなく、自主学習ノートや読書ノートとしても活用し、個人での学習の深化を図る。 ○協働的な学習 シンキングツールや発表ツールをアプリで使うなどして、一人一台端末を活用しながら、児童の意見交換を活性化させる。 ○辞書機能の活用 紙の辞書とともにICTの辞書機能を活用し、児童が自主的に語彙を学習する環境を整える。 ○共同編集 全てのソフトを同じ仕様に統一することで、個人の作成した文書を、スムーズにクラウド上で児童同士が意見を共有しながら学習する。 ○録音機能の活用 自分の音読を録音・再生し、発音や抑揚を改善する。	一人一台端末や電子黒板、生成AIや辞書機能を活用して、語彙の習得や思考の整理を行わせたり、ポスターセッションやクラウドでの意見共有を行わせたりして、学習の充実を図る。 ○情報機器の連携的活用 一人一台端末と電子黒板、さらにホワイトボード等を連携させ、文章構造の把握や思考の整理、語彙に関する学習などを効果的に行う。 ○生成AIの活用 生成AIを活用した、家庭と学校の学びの好循環を創出する取組等を実施し、生成AIの適切で効果的な活用を学び合う。 ○情報の整理 一人一台端末等を用いたポスターセッションを繰り返し行うなどして、図や絵、記号などを用いながら情報を整理して考えを伝える力を養う ○辞書機能の活用 ICTを活用して語句の意味などを調べ、言葉の理解を深める。 ○クラウド機能による意見の共有 「読むこと」の単元のはじめに文章に対する疑問や考えたいことをクラウド上に挙げさせたり、活動中に生徒相互にクラウドに助言や気付きを示させたりして、意見を共有しながら学習を進める。

5. 他の学校にも無理なく展開可能な国語科の取組や工夫について

小学校	中学校
読書活動の推進や語彙に関する学習、地域の図書館との連携、ICTを活用した文集作りなどを通じて、読むことの力や表現力を高めるとともに、読書習慣の定着や語彙の習得を促す。 ○読書活動の推進 冊数を競うのではなく幅広い読書を目指した全校読書活動を行うなどして、読書への関心を高め、習慣化する取組を行う。 ○表現活動の充実 一人一台端末とクラウドを活用し、学びのまとめとしての文集づくりを児童自らが協働しながら執筆、推敲、編集、共有できるようにする。 ○地域との連携 公共図書館や学校図書館を活用し、地域の本を教材にして学習を深める。 ○語彙指導の充実 「言葉のコレクション」など、複数の用例を集めて比較し、共通する使い方を抽出する活動等を行わせ、児童の語彙の習得と活用を図る。 ○身近な話題の活用 教科書教材に加え、実生活に関連した文章を教材にし、読むことの力を高める。	読書環境の整備や図書館の活用を通じた読書活動の推進、学習課題や学習方法の選択肢の提示、言葉への意識の喚起、デジタルと併用したアナログな教具の活用を通して、生徒の主体的な学びの充実や、読むことの力、表現力の育成を図る。 ○読書活動の推進 教室内に必要な読書環境を整えたり、公共図書館や学校図書館を活用する時間を多く設けるなどして、読書活動を推進する。 ○学習に関する選択肢の提示 学習課題や学習方法に選択肢を設け、生徒の興味・関心や習熟度に合わせて、生徒が自分事として学習を深めようとする意識を高める。 ○言葉への意識の喚起 例えば敬語やインターネット上でふれている言葉など日常使用する言葉に意識を向けて考えさせるようにしたり、文章教材と日常生活の言葉とを関連させるように促したりするなどして、言葉へのこだわりをもつよう意識の喚起を図る。 ○アナログな教具の活用 中学生であっても漢字や語句などに関する物理的なカードや掲示には興味・関心をもつため、デジタルと併用しながら使用する。

6. その他、顕著な特徴が認められる取組や工夫について

小学校

成果物の協働的な作成を通じた対話づくり、学力向上支援、図や画像等の活用、他教科等と連携した発表、教員の多様な研修の実施など、様々な取組を通して学習活動の充実を図る。

○**対話が生まれる機会の設定** 俳句づくりや文集づくりなど様々な協働的な活動の機会を設け、その中で児童同士が自然と議論し多様な意見を交流できるよう工夫する。

○**自己表現の支援** 学力向上に関する専門職員やチームティーチングの教員など様々な人々が関わっていくことで、児童が安心して意見を発表できる環境を整える。

○**図や画像等の共有と活用** 教師と児童とで共有された写真や図などを用い、学習活動への興味・関心を高める。

○**他教科等と連携した学習** 多くの国語科の授業が他教科や総合的な学習の時間等と連携しており、そのような中で成果を発表する機会を設け、表現力を育てる。

○**様々な形での教員研修** 教員の個人設定課題、教員全員による交流授業、教師が個人の研究を短時間で発表するミニ研修など、様々な形の教員研修を複合的にを行い、教育効果を共有したり高めたりする。

中学校

生徒の対話の重視、図や画像等の活用、地域で一貫した教科指導の実施、教科等を越えた日常的な指導の連携、単元テストの実施など、様々な取組を通して学習活動の充実を図る。

○**教師の発言の抑制による対話の重視** 教師の発言を必要最低限にとどめ、できるだけ多くの時間を生徒同士の対話に充てることで、生徒同士が多様な意見に触れられるようにし、思考の広がりや深まりを促す。

○**図や画像等の活用** どの授業においても表現活動が重視されており、その際には話や文章に加え、図や写真などを活用することで多様な思考力を育成する。

○**地域で一貫した教科指導の実施** 小学校と合同の研修会を定期的に行い、小中が連携した教科指導を行うことで、学習履歴を踏まえた教科指導を行うとともに、地域で一貫した教育方針に基づいた指導を行う。

○**日常的な指導の連携** 教科等を越えて教員同士が単元の内容や展開、指導上の工夫、ICTの活用法など情報を共有したり、助言し合ったりする。

○**単元テスト等の工夫** 定期テストの代わりに、一単位時間や単元中の評価、単元テストなどを行い、それらを総合して評価するなどの工夫により、学習の確実な定着を図る。

(3) 研究課題①に係る訪問調査研究の総括

小学校

思考力、判断力、表現力等を育む対話や発表など表現活動の重視、ICTや学習評価の工夫、読書習慣や語彙習得を図る継続的な指導、地域や他教科等との連携、教員研修の充実など、学びの充実を図る多様な取組が認められる。

1. 「考えの形成」について

児童が主体的に考えを深める力を育むため、学習の目標や展開を明確に示し、発問や対話を通じて思考を促す。書く活動や、発表・スピーチ等の機会を増やしたりするなど、自分の考えを表現する多様な活動を取り入れる。

2. 語彙指導の充実、読書の質向上等について

音読や語彙に関する学習を継続的に取り入れ、言葉に対する理解を深めさせ、読むことや書くことの力に生かす。読書活動を推奨したり、多様な読書活動を促したりして本や文章を流暢に読む力の育成を図る。

3. 学習評価について

形成的な評価を重視し、学習の進捗状況を可視化して、学習の質や学習意欲の向上を図る。振り返りシート等を活用し、児童が自ら学びを振り返る機会を増やし、教師による評価の参考とする。

4. 国語科におけるICTの活用について

一人一台端末や電子黒板、辞書・録音機能などを活用し、学習状況の可視化や意見の共有、自主的な学習を促進するとともに、協働的な学びや個別最適な学びが図られるよう、効果的な学習支援を行う。

5. 他の学校にも無理なく展開可能な国語科の取組や工夫について

読書活動の推進や語彙に関する学習、地域の図書館との連携、ICTを活用した文集作りなどを通じて、読むことの力や表現力を高めるとともに、読書習慣の定着や語彙の習得を促す。

6. その他、顕著な特徴が認められる取組や工夫について

成果物の協働的な作成を通じた対話づくり、学力向上支援、図や画像等の活用、他教科等と連携した発表、教員の多様な研修の実施など、様々な取組を通して学習活動の充実を図る。

(3) 研究課題①に係る訪問調査研究の総括

中学校

多様な視点や対話を通じた思考の深化、語彙指導や読書指導、ICTの活用、明確な評価規準の設定や振り返りの工夫、教員間の連携や学習環境の整備など、学びの充実を図る多様な取組が認められる。

1. 「考えの形成」について

生徒の主体的な学びを促進するため、多様な視点を提供し、話し合い活動を活用する。学習の選択肢を広げたり、単元ごとの課題を明示したりするなどして、思考の深化を促す。

2. 語彙指導の充実、読書の質向上等について

音読・朗読を通じて文章の意味理解を促し、ICT活用も含めた語句の理解を図り、語彙を豊かにする。多様な本や文章を読む読書活動を推進し、文章を流暢に読んで考えを形成する力の育成を図る。

3. 学習評価について

評価規準の明示や記述課題、ICTを活用した振り返りを通じて生徒の学習状況を把握する。また、評価の観点を明確に示すことで、生徒による自己評価等の評価を充実させ、教師による評価の参考とする。

4. 国語におけるICTの活用について

一人一台端末や電子黒板、生成AIや辞書機能を活用して、語彙の習得や思考の整理を行わせたり、ポスターセッションやクラウドでの意見共有を行わせたりして、学習の充実を図る。

5. 他の学校にも無理なく展開可能な国語科の取組や工夫について

読書環境の整備や図書館の活用を通じた読書活動の推進、学習課題や学習方法の選択肢の提示、言葉への意識の喚起、デジタルと併用したアナログな教具の活用を通して、生徒の主体的な学びの充実や、読むことの力、表現力の育成を図る。

6. その他、顕著な特徴が認められる取組や工夫について

生徒の対話の重視、図や画像等の活用、地域で一貫した教科指導の実施、教科等を超えた日常的な指導の連携、単元テストの実施など、様々な取組を通して学習活動の充実を図る。

6.研究課題②（「C読むこと」における各学習過程に関する特徴的な結果の抽出）に係る研究成果

（1）「C読むこと」における設問の内容・問題形式および質問項目等の関係の分析

① 分析対象・方法等

- 調査対象 令和5年度及び令和6年度小学校調査及び中学校調査
（対象児童生徒：小学校6年生、中学校3年生）
- 分析方法 「C読むこと」に位置付けられた設問間の相関
「C読むこと」の設問の正答率と児童質問、学校質問の回答の相関
- 「C読むこと」に関する設問
 - 【令和5年度】 小学校調査：2一、2二、2四（記述式）
中学校調査：2二、2三、2四（記述式）、4三（記述式）
 - 【令和6年度】 小学校調査：3二（1）、3二（2）、3三（記述式）
中学校調査：2一、2三、2四（記述式）、4二

② 分析結果の概要

問題形式との相関

【令和5年度】

- ・ 中学校の2問の記述式設問はいずれも全体の正答数との相関が高い。
（中：2四（ $r=.569$ ）、4三（ $r=.611$ ））

【令和6年度】

- ・ 記述式設問（小：3三、中：2四）は他設問（例えば選択式の「構造と内容の把握」と「精査・解釈」を問う設問）との相関が高めで、国語に関する多様な力が関係。
- ・ 個別の設問内容による影響が出題形式による影響よりも強く関係している可能性。

「C読むこと」に位置付けられた設問間の関係

【令和5年度】

- ・ 小学校では、複数の資料を読む大問において、同じ「精査・解釈」に関する設問同士（2一、2二、いずれも選択式）の相関は、他の設問との相関と比べて相対的に高い（ $r=.234$ ）。
- ・ 中学校では、説明的な文章を読む大問などにおいて、「精査・解釈」、「構造と内容の把握」、「考えの形成」をそれぞれ問う設問の間の相関はいずれも高め。特に「考えの形成」を問う記述式設問（2四）と「精査・解釈」（表現の効果などを考える）を問う記述式設問（4三）との相関は相対的に高い（最大 $r=.311$ ）。

【令和6年度】

- ・ 小学校では、文学的な文章を読む大問において、「構造と内容の把握」を問う設問（3二（1）、選択式）と「精査・解釈」を問う設問との相関（3二（2）、選択式、 $r=.227$ ）（3三、記述式、 $r=.219$ ）は、他の設問との相関と比べて相対的に高い。
- ・ 中学校では、説明的な文章を読む大問において、「構造と内容の把握」に関する設問（2三、選択式、主張と例示との関係を捉える）と直後の「精査・解釈」に関する設問（2四、記述式、要約）の相関は、他の設問との相関と比べて相対的に高い（ $r=.219$ ）。
- ・ 中学校では、「精査・解釈」を問う選択式設問と記述式設問の相関は、他の設問との相関と比べて相対的に高い（ $r=.238$ ）。

「C読むこと」の設問と「知識及び技能」を問う設問との相関

【令和5年度】

- ・ 「C読むこと」の設問と「知識及び技能」を問う設問との相関には、一貫した傾向はみられない。

【令和6年度】

- ・ 「C読むこと」の設問と漢字を正しく書く設問（小（2三ア、2三イ）、中（3三））との相関は高い。
- ・ 「C読むこと」の設問と文の成分の順序や照応を問う設問との正答数の相関は必ずしも高くない。

「C読むこと」と質問回答との関係（数値は令和6年度。令和5年度調査も同傾向）

「C読むこと」の設問と質問項目との相関は、学校回答（小: $r=.018$ 、中: $r=.019$ ）よりも児童・生徒回答（小: $r=.052$ 、中: $r=.075$ ）の方が高く、教科調査と大きく関係

「C読むこと」と児童・生徒質問回答との関係（令和6年度。令和5年度もほぼ同傾向）

相関の上位項目（小学校・児童質問）

- ・ 国語の授業理解
- ・ 児童の課外の学習習慣や読書習慣
- ・ 課題解決に向けて自分で考え取り組む
- ・ 国語の授業で自分の考えを工夫して書く
- ・ 自宅の本の冊数
- ・ 算数の授業理解
- ・ 国語の授業で人物の性格や特徴等を具体的にイメージし、表現に着目して読む
- ・ 資料や文章、話の組み立て等を工夫して自分の考えを発表する

相関の上位項目（中学校・生徒質問）

- ・ 課題解決への積極性・自律性
 - ・ 課外の読書習慣
 - ・ 自宅の本の冊数
 - ・ 資料や文章、話の組み立て等を工夫して自分の考えを発表する
 - ・ 英語の授業で読解や聴解で概要や要点を捉える
 - ・ 国語の授業で、必要な情報に着目して説明文を要約し内容を解釈する
 - ・ 数学の授業理解
- ※「国語の授業理解」は児童に比べて順位が下がる

「C読むこと」と学校質問回答との関係（令和6年度）

相関の上位項目（小学校・中学校：学校質問）

- ・ 発言や発表の工夫
- ・ 課題解決への積極性・自律性
- ・ 落ち着いた環境

7. 研究課題③（特定の領域の調査結果と他の領域または質問調査結果との相関に関する特徴的な結果の抽出）に係る研究成果

（1）全体及び学力層別にみた領域間の関係、並びに各領域と質問項目の関係

① 分析対象・方法等

調査対象：令和6年度小学校調査及び中学校調査（対象児童生徒：小学校6年生、中学校3年生）

対象領域：「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の各領域の平均正答率

分析の観点：

- ・ 領域間の相関の全体的傾向
- ・ 領域間の相関の学力層別傾向
- ・ 各領域と質問項目との関係

② 分析結果の概要

全体の正答率と各領域との相関（小・中）

- ・ 小学校：3領域のうち、「C 読むこと」領域との相関が最も高い（ $r=.708$ ）
- ・ 中学校：3領域のうち、「C 読むこと」領域との相関が最も高く、その相関性は小学校以上（ $r=.790$ ）

各領域間の相関

小・中ともに、全体的に中程度の相関（ $r=.268\sim.424$ ）

学力層別の差（※学力層：ここでは、全体の正答数の高い順に、A層、B層、C層、D層と4分の1ずつに分けたもの）

【小学校】 平均正答率において、A層とB層の差が最大なのは「A 話すこと・聞くこと」領域（22.5ポイント）であり、C層とD層の差が最大なのは「C 読むこと」領域（27.6ポイント）であった。

【中学校】 平均正答率において、A層とB層の差が最大なのは「C 読むこと」領域（24.8ポイント）であり、C層とD層の差が最大なのは「B 書くこと」領域（28.5ポイント）であった。

各領域の正答率と児童・生徒質問回答との相関

【小学校】

- ・「記述式設問で最後まで解答を書こうと努力したか（例：全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した）」との相関が最も高いのは、3領域のうち「C読むこと」の正答率

【中学校】

- ・各領域とも、「国語の授業で、必要な情報に着目して説明文を要約し内容を解釈する」「英語の授業で英語を読んだり聞いたりして概要や要点を捉える」「課題解決に向けて自分で考え取り組む」「課外での読書習慣」「自宅の本の冊数」などとの相関が高い。
- ・学校質問回答では、英語の授業でスピーチやプレゼンテーションなどまとまった内容を発表する言語活動の実施や、数学の授業で筋道を立てて説明させる活動も、国語の正答率と一定の相関

8. 研究課題④（その他、令和6年度調査結果に関する顕著な特徴についての分析）に係る研究成果

（1）その他の顕著な特徴について

① 分析対象・方法等

調査対象 令和6年度小学校調査及び中学校調査（対象児童生徒：小学校6年生、中学校3年生）

分析の観点

- ・国語と算数・数学の正答数の相関
- ・無回答・解答時間
- ・性差

② 分析結果の概要

国語と算数・数学の正答数の相関

- ・ 小学校児童：国語×算数（ $r = .687$ ）、中学校生徒：国語×数学（ $r = .718$ ）
- ・ 小学校：国語の漢字を正しく書く知識及び技能に関する設問、「読書」に関する知識及び技能を問う設問、主語・述語に関する設問、「C読むこと」の「構造と内容の把握」に関する設問の正答数が、算数の正答数とやや高い相関
- ・ 中学校：国語の説明文の内容を要約する記述式設問（「C読むこと」の「精査・解釈」）、漢字を正しく書く知識及び技能に関する設問、の正答数が、数学の正答数とやや高い相関

無回答および解答時間の分析

- ・ 無回答率が高い設問

小学校：全記述式設問（「B書くこと」「C読むこと」、漢字を正しく書く知識及び技能に関する設問

中学校：全記述式設問（「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」、漢字を正しく書く知識及び技能に関する設問

- ・ 他の設問（漢字を正しく書く設問と記述式設問以外）では、終わりの方の設問に無回答が多い

性差の傾向

- ・ 国語の正答率：女子が男子を上回る（小・中とも）

小学校児童：+6ポイント、中学校生徒：+7ポイント（算数・数学は顕著な差なし）

- ・ 小・中ともに特に記述式設問で差が顕著（最大 +16ポイント）

- ・ 女子：「国語の勉強は好きですか」（小・中とも）との相関が男子を上回る

ゲームの時間は男子より少ないが、SNSや動画視聴の時間が男子より長い傾向